

ひとはくの調査・研究について

客 野 尚 志¹⁾

The Research and Study Of Museum of Nature and Human Activities, Hyogo

Takashi KYAKUNO¹⁾

要 旨

本論考では、ひとはくの研究のあるべき姿について、その基本的な理念とそれを遂行するための背景的条件の視点から論ずる。特に、研究者という独自の職能を通して、博物館活動を行い、その活動をもって社会に貢献できる方法について考察する。具体的には、まず研究者が研究者としての強い個を確立し、その中で研究者としての資質を確保することが肝要である。そして、その上で、社会貢献を見据えた組織的な研究と、社会の科学に対するロマンを向上させるような夢のある研究としての個別課題の研究を両立させることが求められる。そして、この二つのタイプの研究の相互作用により、博物館の研究レベルが向上し、それをもってはじめて生涯学習を中心とした博物館のサービスの向上が可能となる。この両面の研究を遂行するために、適切な予算配分や組織形成、そしてなによりも適正な評価枠組みの形成とそれによる研究評価、そのフィードバックのプロセスが重要である。

キーワード： 研究、研究者としての資質、個、組織的研究、個別課題型研究、評価

はじめに

一般に、博物館における研究の意義や役割は大学におけるそれとは異なると考えられる。すなわち、大学における研究は、純粋に科学的な蓄積に寄与することを通じて社会貢献を果たすことと並列して、次世代の社会の担い手である学生に対する教育が求められるのに対して、博物館における研究では科学的な蓄積への寄与に加えて、一般社会の不特定多数の生涯学習活動に寄与する研究が求められる側面があることである。そして、大学と同様に博物館でも、"教育"を語る以上、その"教育者"としての資質向上、資質維持のためにも研究は必要欠くべからざる点である。かような点から考えると、博物館における研究は、一般社会に目を向け、その成果も一般市民に広く還元されることが求められる。さらに、研究を通して、研究員自身が自らの知識と判断力などを常に鮮烈なものにしておき、切り口のするどいメッセージを論文

や各種セミナー、展示などを通して、社会に対して訴えかけていくことが必要である。また、研究活動を通じて、貴重な自然・環境を次世代に継承していくという役割も博物館特有の義務であろう。

現在の研究一般をとりまく状況を見ると、国立大学などの独立行政法人化、大学の付置研などの整理統廃合、さらに行政の研究機関の独立行政法人化などの流れの中で、確実に博物館でも適切な研究業績とその成果の社会還元が求められる時代になりつつある。大学における研究も、学生の教育効果の高い研究かもしくは社会への還元性の高い研究が求められる傾向にあり、すぐに結果の出ないいわゆる基礎的研究の存在基盤が大きく揺らいでいる。また、一般行政事務においても、コストとそれに対する効用がシビアに評価され、多くの公共事業が見直される中で、行政の研究機関もその存在価値や役割が厳しい批判の目にさらされているのは否めない事実である。このような状況を踏まえ、博物館の独自性を念頭に

¹⁾ 兵庫県立人と自然の博物館 〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目 Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

おいた新しい研究のあり方が議論される必要がある。

研究者を取り巻く社会状況とひととはくの研究を取り巻く状況

理系研究者を取り巻く社会状況

理系研究者をとりまく社会状況はこの数年で大きく変化しているといえる。従来の比較的静かでいったん採用されればあまりシビアな評価を受けずに、静謐に研究や教育に取り組むという恵まれた環境は終わりを告げつつあり、研究者の能力主義評価や予算獲得やポスト獲得のための競争化が進み、ある意味で研究者個人の實力が厳しく評価にさらされる時代が到来したといえる。表にそれらの主たるものをとりまとめた(表1)。この中でもっとも重要なものが研究者の研究活動評価であるが、これについても論文数のみならず、その論文の質までが評価の対象となりつつあり、このもっとも顕著な形が論文評価におけるインパクトファクターの勘案や採用時の年限制の導入であるといえる。つまり、研究者は、つねに評価の高い学会誌に継続的に論文を提出することが求められているのである。そして、その上で教育活動などを確実にを行うことが求められている。

また、社会全体としての理系離れは一方で深刻な問題として新聞紙上などでも取り上げられ、子どもたちの理科嫌いも大きな課題となっている。この現象に並行して、日本の技術力の低下、知的生産力の低下が問題視されている。この背景として、理系出身者の待遇や報償の面において評価が十分でない側面があることはよく指摘される。つまり、若者が理系の学問を修めることにたいして、“夢”を見ることができない土壌があるのである。その一方で、企業などでは博士号取得者の雇用を増加させており、アメリカ流に専門的知識を積極的に評価する動きも徐々にではあるが見られつつある。これらのことを勘案すると、研究者は自らの専門性にしっかりと立脚した上で、強い個を確立し、継続的に研究活動をすすめ、それを積極的に世にアピールして、実際的な社会貢献を図るとともに、高い視点から科学のロマンを世に示す必要があるといえよう。そして、そのロマンを次世代の理系学問を学ぶ若者に的確に伝えていくことが求められている。

理系研究者を取り巻く社会状況
<ul style="list-style-type: none"> ■ 研究評価-Impact Factor による業績評価 ※海外誌へのシフト→本格的な頭脳流出の危機 ■ 競争的外部資金の積極的な獲得の推奨 ■ 年限制導入による、常態的な論文生産の要求 ■ 民間企業などの博士号取得者の積極的採用の呼びかけ ■ スタープレーヤー出現への世論の期待 ※ノーベル賞受賞者獲得が国に！？ ■ 深刻な理科離れと、理系不人気?・技術立国ニッポン再建への期待 ※理系出身者よりも文系出身者の方が社会的にみて指導的立場につくことが多い。
ひととはくを取り巻く社会状況
<ul style="list-style-type: none"> ■ 「県政」や「地域課題」を意識した研究課題 ■ セミナーや企画展などの博物館の諸事業とつながる研究設定 ■ 「血税」を使う研究機関として、社会的ニーズに応じた研究、研究成果の社会還元、説明責任。

表1 理系研究者を取り巻く社会状況とひととはくを取り巻く状況

ひととはくの研究を取り巻く社会状況

次に、ひととはくの研究を取り巻く研究の状況について考える。同様にこれを表に取りまとめた(表1)。特に考慮すべき項目としては、税金を使って研究していることに起因して、研究の社会還元や地域還元、説明責任が大学などよりもさらに求められること、研究と博物館の諸事業を限られた時間内で実現するために、効率的に研究を行うか、事業につながる研究を行うかいずれかの道を取らざるをえないことなどがあげられる。特に、後者は、企画展やセミナーなどにつながる研究を常に行っていないと、数年で既存の材料が枯渇してしまうために、博物館のサービスの低下という問題にもつながりかねない大きな課題といえる。つまり、博物館の研究者としては、社会を見据えた上で、税金を使って研究をしているという事実を認識し、これを種々の博物館サービスを通して社会に還元できるような研究を推進する必要があるといえる。

ひととはくの研究の基本理念

上記の二つの一見矛盾する側面を満たす研究スタイルこそが、ひととはくの研究員に求められる資質といえる。そして、この研究スタイルについて考察すると、以下のような研究理念が導かれよう。すなわち、博物館における研究は大きく二つのタイプに分けられるべきであると考え(図1)。ひとつは、博物館の組織力と人材を有効に活用し直接的な社会貢献を狙う「組織的研究」であり、もう一方は研究者の個々の専門性や知識、競争力などに立脚した「個別課題型研究」である。前者は、その名のとおり、博物館の使命として、自然・環境の保全や管理に寄与する一連の結果の継続的な導出を目的としており、博物館のレーゾンデートルそのものともなりえるタイプの研究である。たとえば、70年代に研究者集団「ローマクラブ」がまとめたレポート「成長の限界」は全世界に地球の有限性と脆弱性を知らしめ、その後の各国の環境政策の展開につながった歴史的な偉業である。このような偉業は高い専門性と知識を有する研究者集団が適切に役割分担をし、また協働することによってはじめてなしたものと見える。一方、個別課題型研究は、あくまでも研究者個人の豊かな発想と惜しみない作業の上に成り立つ研究である。型破れであっても発想豊かな研究は、その後の大発見につながる可能性がある。個人の時間を使うことも惜しむことなく、常に問題に取り組み、他の研究者からの批判を恐れることなく、独自の理論や解釈を打ち出すことのような研究もまた必要である。多くのノーベル賞級の研究は、このような不断の努力と強い意志によってなされたものと考えられる。また、自らを頼みこのような型破れな研究を継続して行い、そしてその中で一定の結果を出し続けることこそが偉大な業績に

つながっていくものと考えられる。

そして、これらの研究が数多く創出されることにより、博物館は知的な刺激に満ち溢れた場となり、訪れる県民や行政関係者にも刺激を与えることができるようになる。また、このような知的刺激に浴する目的で来館する人々からも、セミナーなどを通して逆に館員が刺激をうけることにより、博物館が一種の知的サロンとして機能することが期待されるといえる。

これらの2つのタイプの研究は、互いに相反するものではなく、相互に作用しあうものである。つまり、個々の研究者が個別の課題研究を通して、自らの個性と専門性を研鑽し、それを組織的研究で発揮することにより、初めて個々の専門性が組織のなかで生きてくる。逆に、組織的研究を通して、他の研究者から受けた刺激やそこで学んだ知識や経験などは、個別課題型研究に新しい視点をもたらしてくれるであろう。ただし、この相互作用が有効に働くためには、個別課題型研究と組織的研究のいずれもが高いレベルのものであり、またそれに従事する研究者も研究者として高い資質を維持している必要がある。つまり、他の研究者に知的な刺激を供与することができる能力があること、また他の研究者からの知的な刺激を自らの学問体系の中で整理ないし昇華できる能力があることが求められる。そして、このような相互作用がスパイラル上に展開していくことで、博物館の研究の質が向上し、ひいてはそれが博物館サービスの向上にもつながっていくものと考えられる。

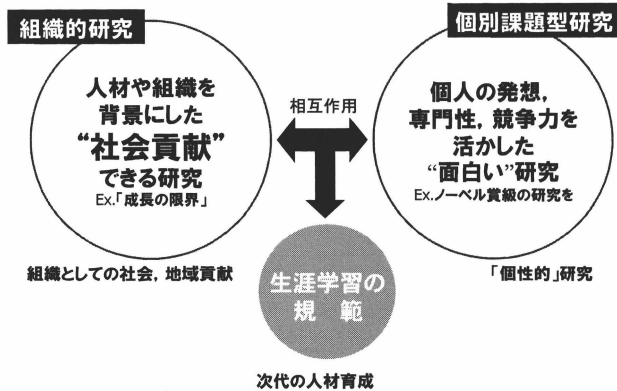


図1 二つのタイプの研究の共存と相互作用模式図

ひとはくの調査・研究を支えるシステム

この二つのタイプの研究を適切に実現するためには、その研究の周辺条件が適切なものであることも同時に求められる。そのポイントを整理したものが図2である。この図では発起、予算措置、評価の各点について、組織的研究と個別課題型研究の2つのタイプの研究のあるべき姿を整理している。この中でも特に研究評価が重要であろう。組織的研究においては社会への還元度やキャラバン事業や企画展などの博物館サービスでの活用程度

と、そのサービスの受益者の満足度が特に需要で、委託などが元となって始められた研究の場合は、委託者の満足度なども鍵となる。また、新聞やTVなどでの紹介や、一般向けの理科系のジャーナルなどでの掲載も評価の一つのポイントであろう。その一方、個別課題型研究においては、学会論文への提出状況や科研費をはじめとした競争的外部資金の獲得状況をはじめ、専門書、普及書の著書、その後のセミナーへの援用などで評価される必要がある。

また、その発起においても、研究員が思いつきのまま漫然と提案を行うのではなく、組織的研究においては、行政や企業からの委託金や助成金の獲得を前提にすすめ、課題研究においては研究計画などを文書化して広く説明するとともに、その後の達成状況を当初の計画書と比較検討するなどの措置が求められる。予算においても、過去の実績やその課題の社会的意義や博物館サービスへの援用の可能性を見据えて、適切かつ公平な配分がなされることが必要である。

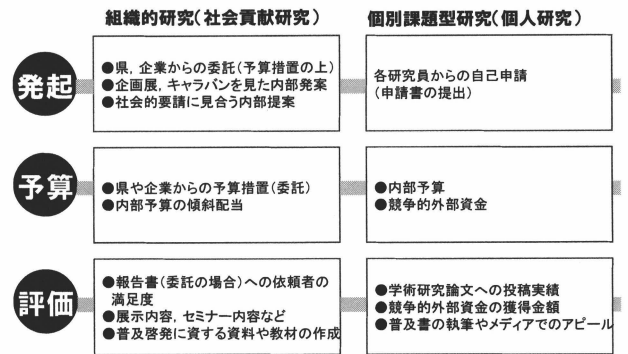


図2 ひとはくの調査・研究を支えるシステム

ひとはくの調査・研究により期待される成果

ここではこれらのシステムにより実現が期待される成果について述べる。まず、組織的研究においては、大きな目標としていわゆる「歴史的な偉業」による社会貢献をあげることができる。また、世界レベルで大きなインパクトを与えるにいたらずとも、地域づくりに貢献することや、ある地域の自然・環境の保全や管理の指針策定に大きく貢献することが期待できる。また、個人レベルの個別課題型研究では、大きな目標としては「ノーベル賞級の大発見」を上げることができるが、これに至らなくとも研究を通したりフレッシュメントが図られていることは、博物館の展示やセミナーにおいて、常に新鮮で斬新な内容を提供できる基盤となるし、次世代の自然・環境の担い手の養成、研究者やインタープリターの養成などの研究指導などにおいて確実に大きな役割を果たすといえる。

さらに、研究成果を博物館のサービスを通して、常に

社会に対して発信し続けることにより、社会の科学に対するロマンを向上させることにもつながっていくと考えられる。

文 献

- 有馬朗人監修(2000) 研究者. 東京図書, 東京, 288 p.
ファインマン, R. P. 著・大貫昌子訳(2000)
ご冗談でしょう, ファインマンさん (上).
岩波書店, 東京, 336 p.
ウェーバー, M. 著・尾高邦雄訳(1980)職業としての学問.
岩波書店, 東京, 92 p.